
5月の普及活動状況

～県下10農林事務所農業普及課と農業経営課技術支援担当の取組～



岐阜県農政部農業経営課

＝ 目 次 ＝

ダイジェスト版・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1

各農林事務所農業普及課

岐阜農林事務所農業普及課・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 4

西濃農林事務所農業普及課・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 6

揖斐農林事務所農業普及課・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 8

中濃農林事務所農業普及課・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 10

郡上農林事務所農業普及課・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 12

可茂農林事務所農業普及課・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 14

東濃農林事務所農業普及課・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 16

恵那農林事務所農業普及課・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 18

下呂農林事務所農業普及課・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 20

飛騨農林事務所農業普及課・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 22

農業経営課技術支援担当

農業経営課技術支援担当・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 24

< 5月普及活動状況ダイジェスト版 >

新たな産地づくりの推進 ～活力ある新産地づくり～

岐阜農林 ■アスパラガス 換気扇を使わない、オープンハウスの導入を支援

アスパラガスハウス長期どり栽培において、盛夏期の換気扇の騒音と電気代コストが問題になっている。そのため、農業普及課では、換気扇のいらぬオープンハウスの導入により高温を解消する効果と収量・品質に及ぼす影響について調査を行う予定にしている。栽培管理をする農家にとって、夏季の高温は熱中症等を誘発しやすく、心身ともに大きな負担となることから、オープンハウス化したビニルハウスが人体への負荷が少なく、熱中症予防に有効であるか、慣行（換気扇）より快適性が向上するか、また収量等を調査する展示試験を開始することとしている。

西濃農林 ■ブロッコリー 23年作付けに向けての活動始まる

西濃管内のブロッコリー戦略会議を4月21日に開催し、各地域の今年度の作付計画について検討した。各地区とも栽培面積は増加し、18haが22ha程度になる見込みである。

また、5月17日に大垣部会役員会、5月23日に大垣部会総会が開催され、農業普及課は、生分解マルチの試験導入や「ふりかけ堆肥エコ」を利用した堆肥施用を前提に説明を行った。

揖斐農林 ■かぼちゃ 産地づくりをめざして、説明会・栽培研修会を開催

農業普及課では、土地利用型水田農業経営の経営安定を支援するため、新たに園芸品目（かぼちゃ）を導入し、かぼちゃの産地づくりをめざす取組を開始した。5月16日～23日に3法人に対して事業の説明及び栽培研修会を実施し、地域に適應した栽培体系を確立するため、品種、定植時期、施肥体系、抑草シートや麦マルチによる省力栽培の実証ほを設置することについて理解を求めた。

5月20日には、3法人の内、㈱サポートいびが第1回目の定植を行った。3法人の他に1営農組合が作付けを予定しており、栽培面積は70aになる見込みである。農業普及課では、担い手の所得向上につながる普及活動を展開し、新たな産地づくりをめざして、関係者と連携を密にしながら取り組んでいく予定である。

可茂農林 ■青ねぎ 品種比較試験、病害防除実証ほ設置

青ねぎ部会では、安定的な周年出荷に向けた品種の組み合わせや、夏期の病虫害防除が課題である。農業普及課では、その解決のため、昨年秋から5～6月出荷向けの品種比較試験を実施するとともに、本年は夏期の軟腐病対策の実証ほを設置する。今後、試験結果をまとめ部会で検討して、周年出荷に向けた技術確立を進める予定である。



恵那農林 ■ブロッコリー 産地づくりに向けて、関係機関と指導方針&意識を統一

恵那地域では、営農組合等の経営補完品目としてブロッコリー栽培に取り組んでおり、今年は120aの栽培が予定されている（昨年は68a）。

農業普及課では、ブロッコリーの産地拡大を「活力ある新産地づくり支援事業」に位置付け、重点的な指導を行うこととしており、第1回目の産地戦略会議を5月24日に開催した。

会議ではブロッコリーの産地化に関する目標設定と指導方針について協議・検討し、生産・指導販売体制及び栽培体系の確立について関係機関と情報共有し意識統一を行った。



【関係機関との意見交換の様子】

主要農産物の生産振興 ～売れる農産物づくりと産地の強化～

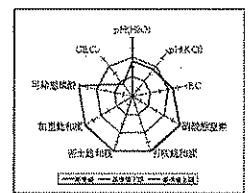
中濃農林 ■農産物加工 研修会で加工組織を支援

5月24日に、関市上之保において、かみのほ特産品加工組合の総会が開催された。昨年度から、道の駅平成やかみのほ温泉等での加工品販売に力を入れており、新たな商品づくりにも積極的に取り組んでいる。農業普及課からは、財務諸表の見方や経営分析について説明したあと、商品考案の参考となる事例や手法を紹介した。

西濃農林 ■トマト トマト部会全員研究会を開催

海津トマト部会全員研究会を5月16日に開催し、次に向けて、夏期高温対策、病虫害防除等について説明した。土壌診断結果と土壌病害発生の傾向、糖蜜による土壌還元消毒（青枯病）等に関心が高まった。

5月上旬までの累計出荷実績（3ヶ年対比）は、数量101%、単価91%、金額91%。全国的な豊作傾向で、价格的に厳しい販売展開が続いている。



【土壌病害発生有無圃場の22年産土壌診断事例(同一生産者)】

担い手の育成確保～明日の農業を担う新規就農者と地域農業を守る多様な担い手育成～

恵那農林 地域が一体となって就農支援をするために

恵那地域では、就農希望者の受け入れ支援を行う体制づくりと、就農相談窓口機能を持った「就農連絡会議」を、平成19年度に普及センター（現：農業普及課）が中心となって立ちあげ、市・農業委員会・JA・県等の機関が情報共有、支援策の検討をしながら就農希望者の支援を行っている。

今年度は、5月30日に第1回目の就農連絡会議を開催した。今回の会議では就農相談者や新規就農を目指す研修者への支援策を検討するとともに、地域が一体となって就農相談や技術習得・資金調達等の総合支援を行う、地域就農支援協議会の設置について協議を行った。協議会は、就農連絡会議の機能を活かしつつ、新たな組織に組み直す方向で検討する予定である。



【新規就農希望者の研修風景】

地域の動き等 ～魅力ある農村づくり～

郡上農林 郡上地域における耕作放棄地対策及び鳥獣害対策の現地検討会

5月11日に郡上事務所全課職員のうち20名が参集し、市内の耕作放棄地対策、獣害対策等の取組について現地検討会を開催した。

「猪鹿無猿柵」や「山菜王国づくり」などの具体的な取組を検証するとともに、現地農業者の声を直接聞き取る等により、今後の課題解決に向けて各課の意識統一を図った。

下呂農林 下呂市飼料用米利用組合設立総会が開催

下呂市において5月25日に市内で生産される飼料用米を畜産農家へ計画的に流通させるため、下呂市飼料用米利用組合の設立総会が開催された。

この組合は飼料米を利用する畜産農家等で構成され、飼料用米の流通調整、利用方法の検討及び情報収集などの活動を行うために設立された。総会後は、下呂市内での飼料米面積が約7haから平成23年度に約21haへ拡大するため販売価格、個別畜産農家の年間使用量、配送時期、形態などの年間計画について情報交換が行われた。

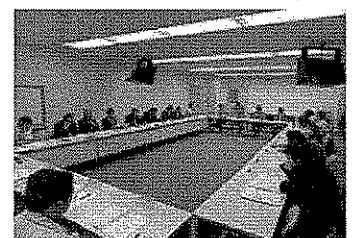
普及課としては、畜産農家等へ供給される飼料用米の安定生産に向け、生産農家への栽培技術支援を行なっていく。

飛騨農林 飛騨蔬菜出荷組合GAPリーダー会議を開催！

5月17日、JAひだ農業管理センターで飛騨蔬菜出荷組合主催によるGAPリーダー会議が開催された。

飛騨蔬菜出荷組合では農産物の安全安心確保、周辺環境への配慮、作業環境の改善を目指し、「ひだGAP」に取り組んでおり、昨年の課題を踏まえ、2年目となる今年度の取組内容についての意見交換や、各地域におけるGAPの動きの情報交換を行った。

農業普及課からJA営農指導員とのプロジェクトチームの中で事前に協議したチェックリストの改正や、今年度の新たな取組（現地確認）等について当会議で説明・提案した結果、今年度は『消費者に見せられる生産現場づくり』を飛騨産地の共通認識として取り組んでいくことが決まった。



【GAPリーダー会議の様子】

～農林事務所農業普及課、農業経営課技術支援担当の取組～

岐阜農林事務所農業普及課の普及活動状況

平成23年5月31日現在

今月の重点活動

■アスパラガス

アスパラガス夏芽出荷に向けて立茎中！

春芽の出荷は、低温の影響から昨年よりやや遅れて3月20日からスタートした。品質は良好で、順調な収穫出荷が行われている。なお、単価は1,200円/kgで昨年より安値で推移している。

農業普及課では、夏芽出荷に向けて、立茎技術を重点的に普及指導しており、日々の巡回と栽培講習会等で技術向上を図っている。



【立茎中のハウス】

主要農作物の生産振興

■水稲 JAぎふ特別栽培米生産推進協議会栽培技術指導

JAぎふ特別栽培米生産推進協議会では、今年岐阜、本巣、山県において特別栽培米を約133ha作付する計画となっている。5月12日にアグリパークで役員会が開催され、農業普及課からH22に被害があったコブノメイガや縞葉枯病対策について啓発指導を行った。今年は施肥改善展示ほも設置し、収量向上を図っていく。

■麦 タマイズミの原種・採種ほ出穂期審査終了

4月28日、5月6日に採種、原種の出穂期審査を実施した。平年より生育は4～5日遅れているが、生育は順調。今後糊熟期審査を行い、タマイズミの種子合格を目指す。

■活力ある新産地づくり支援事業(品目名) アスパラガス

換気扇を使わない、オープンハウスの導入を支援

アスパラガスハウス長期どり栽培において、盛夏期の換気扇の騒音と電気代コストが問題になっている。そのため、農業普及課では、換気扇のいらぬオープンハウスの導入により高温域を解消する効果と収量・品質に及ぼす影響について調査を行う予定にしている。栽培管理をする農家にとって、夏季の高温は熱中症等を誘発しやすく、心身ともに大きな負担となることから、オープンハウス化したビニルハウスが人体への負担が少なく、熱中症予防に有効であるか、慣行(換気扇)より快適性が向上するか、また収量等を調査する展示試験を開始することとしている。

<オープンハウス導入者3戸 5棟>

■えだまめ 消費者収穫体験ほ場の設置

全農・JAぎふ・えだまめ部会では、「岐阜えだまめ」消費宣伝のために、えだまめの収穫体験を計画している。農業普及課では、収穫体験展示ほ場の設置に係る支援を行っている。

4/22：施肥・畝立 5/5、10：定植・防虫ネット被覆、
7/16：消費者収穫体験実施(予定)

5/30GAP運営委員会が実施(枝豆、法連草、大根)され、
本年度の活動計画を立てた。



【収穫体験ほ場畦立の様子】

■いちご 加工用いちごの試験

J A ぎふ及びいちご生産組織が、規格外等のいちごを有効活用するため、加工用いちごの製造を試験的に行った。今回は冷凍いちごを作るため、J A ぎふパッキングセンターのパートと青年部が集まり、いちごのへた取り等の下処理をした後、袋やパックなどに入れて冷凍庫へ保存した。農業普及課では加工用いちごを活用するため、今後も、岐阜市商工会議所と連携し、加工業者（お菓子屋さん）の利用や、J A 農産物直売所で販売を支援していく予定である。



【いちご加工(へた取り)】

■だいこん 品種比較試験

品種試験 23 品種（延べ 58 品種）の比較を行った。有望品種について 6 / 3 役員会で検討する。祝だいこんの増産についても来月検討を予定している。

■さといも 実証ほ試験

各務原市さといも部会では、「うね間を狭くした場合の増収効果及び防草効果の確認」及び「密植栽培の単収確保及び肥料費低減に向けた施肥体系の検討」の実証ほを設置している。農業普及課は、4月27日の役員会で実証ほの概要を説明し、今後、J A と連携し生育調査を行う。

■かき 摘らいの徹底で大玉生産！

生育は 3 ~ 4 月の低温の影響から平年より 5 日程度、遅れている。管内の各かき振興会と農業普及課では、4月下旬から5月上旬にかけて摘らい講習会を実施し、大玉生産のための摘らいの重要性等について指導した。着らい数は平年より少ないが、作業の進度はやや遅れており、5月末まで続いた。

また、農業普及課では、栽培初心者や女性部、定年帰農者等の栽培レベルを向上させるために講習会を各地で開催している。

■花き 生育障害等について現地対応を実施

管内の花き生産者ほ場（5 品目）において発生した障害症状を現地確認し、顕微鏡による状況確認を行った。農業経営課（岐阜駐在）とも連携し、生産者へ情報提供を行った。

担い手の育成・確保

■女性農業経営アドバイザー 今年度の活動開始

岐阜地区の女性農業経営アドバイザーは、岐阜地域食生活改善協議会リーダーとの産消交流を 6 月 21 日に計画をしている。そこで、4月25日と5月6日に協議会の事務局と交流会の内容について協議を行い素案をまとめた。

また、平成 24 年 1 月に本巣市土貴野小学校の 5 年生を対象とした食農交流会を計画しているため、4月27日に木野小学校と打ち合わせを行い、学校のカリキュラムに組み込むこととなった。農業普及課では、食育活動等に取り組む女性農業経営アドバイザーの活動を支援している。

■集落営農組織・営農組合 (園芸品目の取組広がる)

桑原土地営農組合（羽島市）では、今年から園芸品目の栽培に取り組むことになった。5月7日に農業普及課が作業体系、収支等を説明し、J A ぎふ、営農組合員と検討した結果、えだまめとはくさい（加工用）の栽培に取り組むことになった。えだまめに関しては、市内では既に小藪、東方の両営農組合が取り組んでおり、出荷が重ならないように播種時期を調整して栽培が行われる予定となっている。

西濃農林事務所農業普及課の普及活動状況

平成23年5月31日現在

主要農作物の生産振興

■活力ある新産地づくり支援事業（ブロッコリー）

23年作付けに向けての活動始まる

西濃管内のブロッコリー戦略会議を4月21日に開催し、各地域の今年度の作付計画について検討した。各地区とも栽培面積は増加し、18haが22ha程度になる見込みである。

また、5月17日に大垣部会役員会、5月23日に大垣部会の総会が開催され、農業普及課からは生分解マルチの試験的導入や「ふりかけ堆肥エコ」を利用した堆肥施用を前提に説明を行った。

なお、農業普及課では、ブロッコリー栽培マニュアルを作成中であり、6月下旬には完成予定である。

■水稻

乾田直播栽培の拡大

海津市では、6経営体が約74haで水稻乾田直播栽培を行っている（昨年は約25ha）。播種は3月下旬から5月上旬にかけて行われ、4月上旬までに播種されたほ場では、出芽はほぼ順調である。

大垣市及び養老町では鉄コーティングによる湛水直播が5月中旬に行われた。カルパーコーティングによる湛水直播も例年どおり実施されている。農業普及課では播種後においても出芽苗立ち等の調査を踏まえ、肥培管理を指導していく。



【乾田直播きの生育状況
(5月中旬)】

米粉用ハツシモの作付面積拡大

海津市南濃地域では、地元業者との契約栽培により平成21年度から米粉用水稻の作付けを開始している。品種はハツシモで、今年の作付面積は、昨年よりやや増加した15ha程度となる見込みである。

■小麦

小麦の生育状況

小麦の出穂期は、イワイノダイチで4月10～20日頃、農林61号で4月15～30日頃であった。これは昨年と比べ1週間～10日の遅れである。赤かびの防除も出穂状況に合わせ、各地区で行われた。

凍霜害の発生は、昨年度ほどではないものの、10月下旬播種のイワイノダイチを中心に被害が見られており、局部的に冷気が溜まりやすい場所では11月上旬播種の農林61号にも被害が見られる。

両品種ともに、稈長・穂長は短めで、穂数はやや少ない状況である。低温の影響からか、全般に穂揃いが悪く、凍霜害を受けたほ場では遅発茎の遅れ穂が多く見られる。

収穫期は昨年よりやや遅めで、梅雨入りが平年より10日以上早い5月27日となり、赤かび病の後期感染が心配されるが、水分30%を切った時点で計画的に収穫作業に入れるよう、JAと連携をとってほ場巡回を行っている。

■葉ねぎ

葉ねぎの目揃会開催！（神戸町）

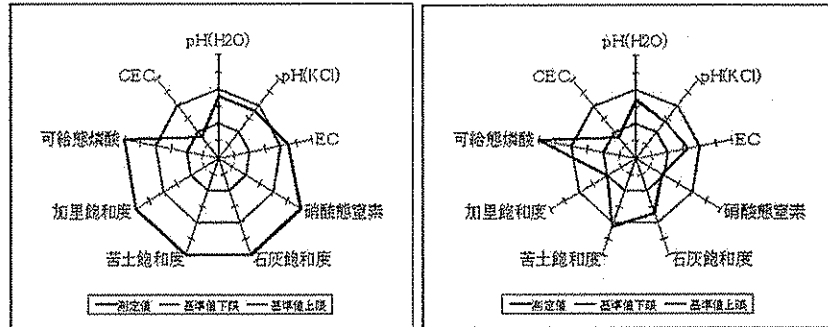
下宮青果部会協議会グリーンねぎ部会の総会、目揃会が5月10日に開催された。部会では、夏期の生産安定にむけて、県の「元気な園芸特産産地育成対策事業」を活用して遮光資材を用いた生産安定技術の実証に取り組む予定である。農業普及課からは防除暦等について指導を行い、実証事業等についても調査等を行う。

■ トマト

トマト部会全員研究会を開催

海津トマト部会全員研究会を5月16日に開催し、次年に向けて、夏期高温対策、病害虫防除等について説明した。土壌診断結果と土壌病害発生傾向、糖蜜による土壌還元消毒（青枯病）等に関心が高まった。

5月上旬までの累計出荷実績（3ヶ年対比）は、数量101%、単価91%、金額91%。全国的な豊作傾向で、価格的に厳しい販売展開が続いている。



土壌病害発生有無圃場の22年産土壌診断事例(同一生産者)

■ 梨

着果良好、生育順調

今年は開花時期、天候に恵まれ結実は良好となった。大玉高品質生産に向けて摘果作業に追われている。農業普及課では、JA営農アドバイザーと連携し、コンフューザーNの設置に関する支援、ナシヒメコンの実証展示ほの設置及び害虫調査を行っている。ハウス梨園では今年も天敵導入を希望されているため、害虫の発生状況に応じた薬剤防除や天敵の導入時期決定の支援を行った。

■ カキ

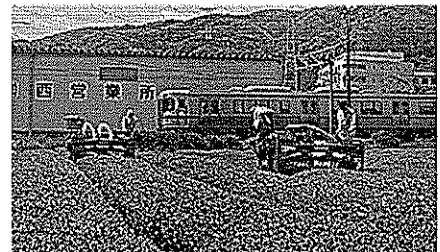
摘蕾講習会

養老町果樹振興会、南濃町柿研究会で、それぞれ5月16、17日に摘蕾講習会を実施した。農業普及課からは、今年は着蕾数の多い年であるため、確実に摘蕾するように指導した。また、鳥獣害対策のため地域ぐるみの柵の設置、狩猟免許を取得し、害獣を補殺するように啓発した。

■ 茶

一番茶の摘採開始

昨年より一週間程遅れて、不婦茶生産組合（垂井町）で一番茶の摘採が始まった。また、大垣市内の茶園でも中旬以降ごろから摘採が始まった。農業普及課からは現地ほ場にて生育の確認及び摘採支援、適期防除のためフェロモントラップによる発生予察を実施している。



■ バラ

総会開催

母の日に向けては、想定されたよりは安定した相場で販売ができた。農業普及課では、土壌養液の分析診断を月1回で実施している。5月16日に開催されたバラ組合総会では、灰色かび病が発生しやすい時期につき、高品質生産に向けた管理の徹底を指導した。

揖斐農林事務所農業普及課の普及活動状況

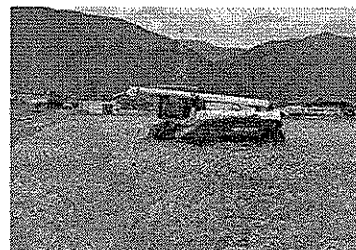
平成23年5月31日現在

今月の重点活動

■土地利用型農業の推進を支援

大麦、5月31日から収穫開始

麦類面積の拡大に向けて23年産から新規に50haの大麦「ミノリムギ」の作付けを行っている。適期収穫に向けて、JAと連携して巡回調査を実施し、荷受け開始日を決定した。台風2号により倒伏が心配されたが、影響は少なく、5月31日から収穫が開始されている。



【ミノリムギの収穫開始】

小麦の赤かび病発生状況調査

5月18日～19日にかけて、JAと連携して小麦の赤かび病発生状況について巡回調査を実施した。今年は出穂期以降の雨が多く、赤かび病の発生が懸念されたが、全地区調査の結果、防除の効果もあり発病穂はごく一部に確認されたのみであった。今年は出穂期が遅く、その後の気温も低めに推移したことから、生育は平年よりも1週間近く遅れている。今後、成熟期調査を実施し、収穫時期の決定に向けた支援を行う予定である。

水稻「つや姫」展示ほを設置

揖斐川町では早生品種として、主としてひとめぼれが栽培されているが、登熟期の高温により白未熟粒が発生し、品質の低下が問題となっている。

そこで、農業普及課では、高温下での高品質生産を支援するため、高温耐性があり、良食味で品種「つや姫」の展示ほを設置し、5月14日に田植えを実施した。今後、生育状況を調査しながら地域適性を把握・検討する予定である。

主要農作物の生産振興

■活力ある新産地づくり支援事業（品目名：かぼちゃ）

産地づくりをめざして、説明会・栽培研修会を開催

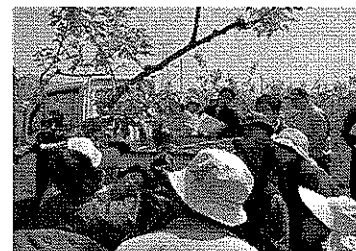
農業普及課では、土地利用型水田農業経営の経営安定を支援するため、新たに園芸品目（かぼちゃ）を導入し、かぼちゃの産地づくりをめざす取組を開始した。5月16日～23日に3法人に対して事業の説明及び栽培研修会を実施し、地域に適應した栽培体系を確立するため、品種、定植時期、施肥体系、抑草シートや麦マルチによる省力栽培の実証ほを設置することについて理解を求めた。

5月20日には、3法人の内、㈱サポートいびが第1回目の定植を行った。3法人の他に1営農組合が作付けを予定しており、栽培面積は70aになる見込みである。農業普及課では、担い手の所得向上につながる普及活動を展開し、新たな産地づくりをめざして、関係者と連携を密にしながら取り組んでいく予定である。

■柿

品質向上をめざし、摘らい講習会を実施

5月3日に大野町かき振興会主催による摘らい講習会が、町内6地区において実施され支援した。同振興会技術部員、JA営農指導員及び普及指導員が講師となり、生産者約425人を対象に大玉果生産に向けた技術向上を図った。



【摘らい講習会の様子】

カキノヘタムシガ性フェロモン剤現地実証支援

近年多くの柿産地で課題となっているカキノヘタムシガの防除に向け、大野町かき振興会では性フェロモン剤現地実証を進めている。農業普及課では、生産者や関係者と連携し、5月6日町内3カ所の実証ほ（約1ha）

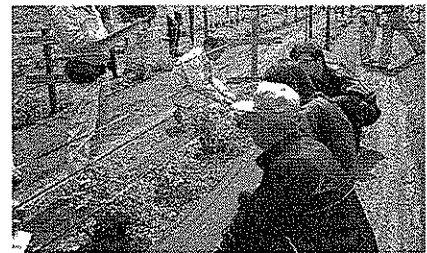
でディスペンサーの取り付けを行った。防除効果について分析・支援を行う予定である。

■実バラ（揖斐川町坂内）

坂内実バラ生産組合 栽培研修会を開催

5月25日、実バラ栽培研修会を開催し、実バラの現地ほ場を巡回した後、室内研修を実施した。

農業普及課では、今後も定期的にはほ場巡回や研修会を行い、良質な実バラの安定生産に向けて支援を行っていく予定である。



【現地ほ場巡回の様子】

■揖斐郡花き振興会

揖斐郡花き振興会・総会および情報交換会

5月26日に揖斐総合庁舎で揖斐郡花き振興会の総会および情報交換会が実施された。

情報交換会では、農業経営課岐阜駐在及び農業技術センターから花き情勢や新品種・新技術についての情報提供を行い、会員相互の情報交換も熱心に行われた。

■よもぎ

優良系統の選抜のため収穫調査

NPO法人山菜の里いびが揖斐川町春日地区で育成しているよもぎの優良系統選抜ほ場において、本年第1回目の新芽の収穫を行った。継続的に品種ごとの収量を計測するとともに、産業技術センターと連携して機能性成分を分析する予定である。



【よもぎ新芽の収穫】

担い手の育成・確保

■集落営農組織

中山間地域で集落営農に向けての取組始まる

集落営農担い手発掘サポート事業に取り組む予定の揖斐川町坂内地区では、6月から集落営農サポーターが地域に入り、活動を開始することになっている。このため、揖斐川町、県及び地元の農事改良組合長ら関係者が参集し、業務の内容や推進体制等について検討した結果、推進委員長に諸家地区改良組合長が就任された。

今後、農業普及課では、関係者の連携を密にし、集落営農サポーターの活動を支援しながら、地域住民の意向を把握し、集落営農に向けた取組を検討する予定である。

■新規就農者

認定就農者の育成

揖斐川町坂内地区での就農を希望している〇氏の新規就農計画検討会が5月25日に開催され、支援した。〇氏は岐南町在住であるが、坂内地区で葉ネギの露地栽培による就農を希望している。今後、農業普及課では、中山間地域の担い手として支援する予定である。

地域の動き等

■大野町

安全・安心な農産物出荷に向けて講習会を開催

5月17日に第3回農産物出荷者大会がJAいび川ファーマーズマーケット大野店で開催された。約450人の出席者を対象にJAからの情勢報告後、西濃保健所揖斐センター及び農業普及課の各担当者から、農産物への適正表示、及び安全・安心な農産物出荷に向けた講習を実施し、関係者の意識統一を支援した。



中濃農林事務所農業普及課の普及活動状況

平成23年5月26日現在

今月の重点活動

■活力ある新産地づくり支援事業（さといも）

円空さといもの生産状況

4月の低温により、出芽が遅れている。例年この時期にはほぼ出芽している。しかし、今年は、無マルチ栽培では、出芽の多いほ場でも6割程度の出芽となっている。

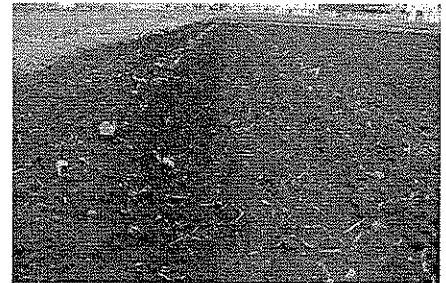
昨年に引き続き、生育遅れにより減収のおそれがあるため、今後の管理についての資料を作成・配布した。

平成22年産円空さといも出荷反省会

5月10日に円空さといもの出荷反省会が行われた。

反省会では、平成22年産円空さといもの出荷実績（出荷量86.8t、販売額1,762万円）を踏まえ、出荷と共同選果の結果について検討した。

市場からは「どの産地も出荷量が減ってきているので、とにかく作ってほしい」との要望があったため、農業普及課では、来年度に向けて、新規栽培者の確保に努めていく。



【さといもの生産状況】

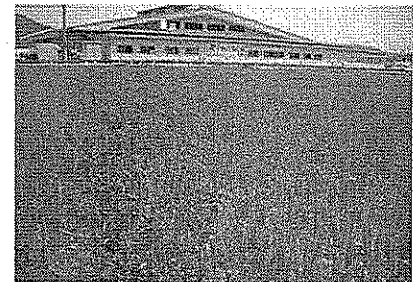
主要農作物の生産振興

■小麦

出穂が遅れ気味

管内の小麦は、4月下旬から5月初めにかけて出穂し、前年に比べ10日ほど生育が遅れている。

農業普及課では、赤かび病の予防対策の実施を生産者に呼びかけるとともに、ラジコンヘリによる防除についても助言するなど支援した結果、2回の予防防除が行われた。5月20日現在、赤かび病の発生はなく、今後は、適期収穫に向けた指導を行う。



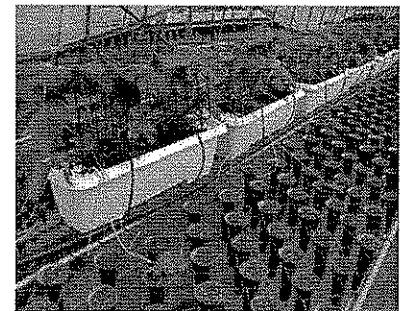
【小麦の生産状況】

■いちご

いちごの生産販売状況

共同出荷もほぼ終盤を迎え、出荷の終了した生産者も多い。現在、次作の育苗中であるが、低温の影響もあり、草丈が例年より低い。

病害虫の発生状況については、アブラムシ、ハダニ、うどんこ病の発生が見られるところもある。農業普及課では、育苗管理について資料を作成し、適切な管理を支援している。



【いちご育苗の管理状況】

■夏秋なす

なす共同販売の開始に向けて

5月24日に、中濃夏秋茄子生産出荷組合の役員会が開催され、夏秋なすの収穫時期を迎えるにあたり、共同販売の開始、目揃え会の開催等の日程を協議した。育苗期から低温で推移したため、全体的には生育が遅れ気味だが、6月上旬には一番果の収穫が見込まれるほ場もあるなど生育にバラツキがあり、6月中旬に改めて判断することとした。また、商品性向上により単価確保を図るため、本年産からC品の袋詰め出荷に取り組むこととしており、規格、荷姿、搬入方法等について検討した。

農業普及課では、なすの収穫が、10月いっぱいまで続けられるよう、基本技術励行による生産性向上について支援していく。

■茶

津保茶の一番茶摘採開始

津保茶の一番茶摘採が5月16日に始まった。低温・干ばつが続いたため、昨年比べて10日程度の遅れとなっている。

開始後10日間で10tを超える出荷があり(昨年は2週間経過)、短期集中型となる見込みである。農業普及課では、番刈りが終了するまで、適切な茶園管理、適期収穫の実施を支援していく。

担い手の育成・確保

■青年農業士

青年農業士6名が誕生

平成23年4月1日付けで、関市4名、美濃市2名、6名の新たな青年農業士が誕生し、5月19日に、岐阜市において認定証交付式があった。

新たに認定を受けた青年農業士は、27歳～34歳の若手農業者であり、農業普及課では、地域の農業者との交流を推進し、若い農業者のリーダーになるよう支援していく。

■かみのほ特産品加工組合

総会及び研修会を開催

5月24日に、関市上之保において、かみのほ特産品加工組合の総会が開催された。昨年度から、道の駅平成やかみのほ温泉等での加工品販売に力を入れており、新たな商品づくりにも積極的に取り組んでいる。農業普及課から、財務諸表の見方や経営分析について説明したあと、商品考案の参考となる事例や手法を紹介した。

■ふる里レディース

いちご大福を販売

関市大杉にある、ふる里農園美の関内で活動しているふる里レディースが、5月の連休中、新商品としていちご大福の加工販売を行った。

農園で収穫した新鮮ないちごを使った大福は、季節限定ということもあり毎日よく売れ、12日間で約360パック(2個入り)を販売した。農業普及課では、今後も、新商品開発を支援していく。

■日本平成村特産品組合

昔作られていた味噌の復活を支援

日本平成村特産品組合では、郷土食を復活することで地域や組合活動を活性化させようと、かつて旧武儀町多々羅地区で作られていた多々羅味噌の再現に取り組むことになった。

5月下旬に、昔味噌を作ったことがあるという高齢者9名から話を聞き、作業工程や味噌の利用方法などを聞いた。20年以上も前に途絶えてしまった味噌について、なつかしそうに思い出を語っていただけ、不明だった点が少しずつ明らかになった。

今後、資料作成や味噌の再現につなげていく計画である。



【聞き取り調査の様子】

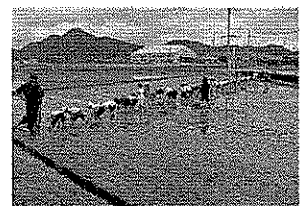
地域の動き等

■小学校総合学習

米づくりを通して食農教育を支援

4月27日に、中有知小学校5年生の総合学習において、農業普及課職員が講師となり、お米についての授業を行った。5月24日には、地元農業者の協力のもと、田植えの授業が行われた。

秋には収穫体験を行う予定で、農業普及課では児童たちに食と農に関心を持ってもらえるよう、今後も支援していく。



【田植え体験の様子】

郡上農林事務所農業普及課の普及活動状況

平成23年5月31日現在

今月の重点活動

■トマト

地域別研修会

5月18日～20日にかけて、トマト部会の地域別研修会を順次実施した。総勢46名のトマト生産者のうち35名が参加し定植後の管理についての研修を実施した。

GAPの取組について1年分の自己点検をまとめて行うと作業が繁雑になるため、本年からは月に1回ずつ少量の自己点検を行う形でGAPを進める事となり、5月の研修会では10項目程度の自己点検を実施した。



地域別研修会

主要農作物の生産振興

■活力ある新産地づくり支援事業（夏秋いちご）

現地研修会開催

ひるがの高原いちご組合では、5月中旬に定植がほぼ終了し大きなトラブルもなく概ね順調に生育している。

5月24日に現地研修会を開催し、各ほ場の生育状況等を確認しながら、定植後の栽培管理について情報交換を行なった。

今年は、越年作型に取り組んでいる生産者がいるため、例年よりも早く（6月中旬）出荷が始まる見込みである。



越年作型の「すずあかね」

■夏だいこん

品種検討会

ひるがの高原だいこん生産出荷組合では5月10日に品種検討会を行なった。

種苗業者から品種試験結果の概要を説明後、農家と疑応答を行った。本年度の品種試験は5月は種の品種を中心に行っている。



だいこん品種検討会

■花き

フランネルフラワー切花試験

県育成品種であるフランネルフラワー鉢花用品種「エンジェルスター」は、花首が比較的伸び、四季咲き性であることが特性である。この特性を活かして高鷲町の切花農家でフランネルフラワーの切花栽培試験を行うこととなった。今後、農業普及課では、農業技術センター及び農業経営課と連携を図りながら切花農家の補完品目として導入が可能であるか検討を行う。



苗の定植作業（5月18日）

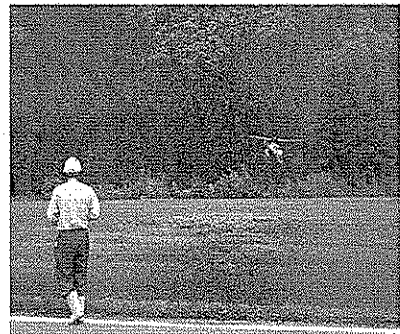
■大麥

安全・安心のための赤かび病防除

麦の生産にあたっては毒素を発生する赤かび病を着実に防除をする必要があり、農業普及課では生育状況を確認しながら適期防除の支援を行っている。

今年は前年より出穂がやや遅れ、防除もやや遅くなっているが、美並地区では、5月2日と5月9日の2回無人ヘリコプターによる共同防除を行なった。

他の地域も順次着実に防除を実施し、安全・安心な大麥生産を進めている。



無人ヘリによる赤かび病防除

■山菜

山菜と間違えやすい有毒植物について研修会

郡上は山菜の宝庫であり、4～6月の朝市直売所では、山採りのものや栽培された山菜が店舗を賑わしている。

しかし、山菜と有毒植物を間違える食中毒事故が全国で発生しているため、市内の山菜出荷者を対象に「山菜と間違えやすい有毒植物について」研修会を開催した。

出席者は、植物の特徴や見分け方を学ぶとともに、山菜に限らず、あらゆる農産物・加工品の生産販売について、安全面・衛生面に気をつけていく意識を高めた。



5～6月に5会場で開催
延べ200人以上参加

地域の動き等

■郡上市美並地域

郡南中学校 稲作体験指導

5月16日、郡南中学校1年生の田植え体験学習が行われ、農業普及課が植え方などの指導を行なった。当日は、体育館前で苗の観察や植え方について説明を行った後、地元の営農組合が準備したほ場に入り田植えを行なった。

今後は、草取りや稲刈り体験を行い、冬には収穫祭を行う予定となっている。



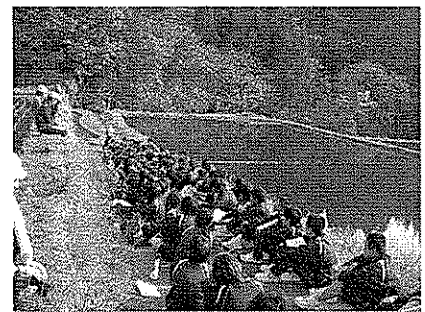
慣れない手つきでの田植え体験

■郡上市白鳥地域

大阪の中学校 修学旅行で田植え体験

5月20日に大阪の緑中学校3年生6クラスの約210人が修学旅行の一行程として郡上市白鳥町へ来て田植え体験を行なった。

農業普及課では白鳥町で農家民宿を行っている「リトルパイン」からの依頼により、お米の話や植え方指導を行なった。ほとんどの生徒が初めての体験であり、自然と農村にふれあえる貴重な体験となった。



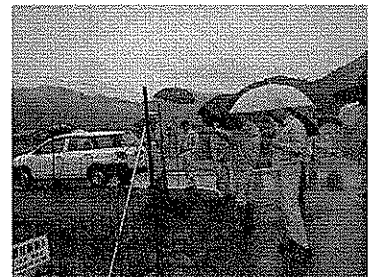
田植え前の説明を聞く大阪の中学生

■郡上市全域

郡上地域における耕作放棄地対策及び鳥獣害対策の現地検討会

5月11日に郡上事務所全課職員のうち20名が参集し、市内の耕作放棄地対策、獣害対策等の取組について現地検討会を開催した。

「猪鹿無猿柵」や「山菜王国づくり」などの具体的な取組を検証するとともに、現地農業者の声を直接聞き取る等により、今後の課題解決に向けて各課の意識統一を図った。



可茂農林事務所農業普及課の普及活動状況

平成23年5月31日現在

今月の重点活動

「集落営農担い手発掘サポート事業」に関する関係機関等打合せ

白川町下佐見・室山集落がモデル地区として選定され、4月28日に白川町役場で県主催による町及び町内NPO団体との打合せが実施された。農産園芸課から事業の趣旨や概要等についての説明後、質疑応答・意見交換等が行われ、集落営農サポーターを派遣予定のNPO法人との打合せも行われた。今後「集落営農組織化支援チーム」の構成員として現地の意向をふまえた支援等を実施していくこととなる。

主要農作物の生産振興

■活力ある新産地づくり支援事業（青ねぎ）

品種比較試験、病害防除実証ほ設置

青ねぎ部会では、安定的な周年出荷に向けた品種の組み合わせや、夏期の病害虫防除が課題である。農業普及課では、その解決のため、昨年秋から5～6月出荷向けの品種比較試験を実施するとともに、本年は夏期の軟腐病対策の実証ほを設置する。今後、試験結果をまとめ部会で検討して、周年出荷に向けた技術確立を進める予定である。



ネギ品種比較の様子

■水稻

育苗期～田植期

昨夏の猛暑の影響から、種もみの発芽不揃い等の発生が懸念されていたが、管内のJA各育苗センターでは適切な芽出し処理がされ、順調な出芽が見られた。中山間地域における早植育苗は草丈がやや短い状況が見受けられたものの、概ね良好に育苗され、移植作業も概ね順調に推移している。今後、農業普及課としても移植後の水稻管理等において随時支援を継続する。

■小麦

乳熟期

管内の3経営体による小麦栽培（美濃加茂市、富加町：約20ha）は、平年より1週間程度遅い生育で経過しているが、4月25日頃から出穂を始め、28日には出穂期を迎えた。

5月上旬から赤かび病防除が実施されている。農業普及課では、今後は、発生状況を確認するとともに、収穫に向けた支援を継続する。



■トマト

美濃白川夏秋トマト販売プロジェクト会議の開催

4月27日・5月18日に生産者・市場・全農・JAら関係者が、スタンドパックのデザイン変更や予冷、契約販売などについて検討し、本年度の販売戦略を樹立した。

夏秋トマト苗見会の開催

4月27・28日に会員が育苗中の苗を持ち寄り、情報交換を行なった。農業普及課からは、pH・ECの調査や育苗管理の注意点など今後の管理について支援を行った。

■いちご

平成22年度産 出荷終了

可茂いちご生産組合協議会による出荷は5月20日に終了した。また、朝取り出荷は5月15日出荷で終了した。4月までは日量100パックであったが、5月は200パックを出荷した。平成23年産用親苗管理が本格化している。子苗用受けポット並べも完了して、ランナー受けを開始しており、農業普及課では健苗育成に向け支援している。

■梨

仕上げ摘果、ジベレリン処理、袋かけ作業

梨の生育は低温により1週間程度遅れたが、着果量は概ね平年並みとなっている。今後は、仕上げ摘果・ジベレリン処理・袋かけ作業について支援をしていく。

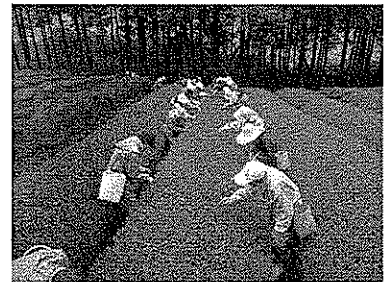
コンフューザーN設置

難防除害虫であるナシヒメシクイに対して、交信攪乱剤であるコンフューザーNの導入に取り組んでおり、第1回目の設置が5月下旬に行われた。

■茶

一番茶摘採始まる

5月12日に白川町の白川北茶生産組合が、管内で最も早く県茶品評会出品用の茶の摘採を行なった。組合員約40名が新芽を丁寧に一芯二葉で摘んだ。県茶品評会へは管内から43点の出品を予定している。一番茶の摘採加工は平年より1週間程度遅れて、5月13日から始まった。一番茶芽の生育は地域差がほとんど無く5月下旬から6月上旬にかけて荒茶生産のピークを迎える。



丁寧に手摘みされる出品茶

担い手の育成・確保

■集落営農組織

「白川町集落営農組合連絡協議会」総会、大豆栽培研修会

5月2日に標記会議が開催された。本年度から新たに2組織が加入し、合計8組織が町内の大豆生産(約20ha)に取り組む。総会終了後、町・JAから戸別所得補償制度の説明や町内豆腐工場の拡張等について情報提供があり、農業普及課からは、大豆の高品質・安定生産に向けた栽培上の留意点等について説明した。

■担い手組織

「みのかもファーマーズ倶楽部」打合せ会議

美濃加茂市内の若い農業者13名で組織する「みのかもファーマーズ倶楽部(MFC)」の打合せ会議が4月27日、5月10日、18日に開催された。内容は、日本昭和村や量販店への販売コーナーの設置、製菓会社と連携した特産品づくり、軽トラック市の開催及び直売所の設置(7月上旬)などである。農業普及課は、MFCを地域活性化団体と捉え、将来的には法人化も見据えつつ、市やJA・地域の農業者と連携し、引き続き支援する。

■新規就農者

全農いちご研修所卒業生就農開始

平成23年度の全農いちご研修所の卒業生が、地元的美濃加茂市でいちご経営を開始することとなり、農業普及課では、補助事業及び就農支援資金の利用にかかる支援並びに育苗の指導をおこなっている。育苗に関しては、JAめぐみの育苗施設を利用することから、5月12日には施設に親株を搬入して営農の準備を進めており、5月下旬から採苗が始まる。



地域の動き等

■可児市

地元大豆利用の特産品開発に向けた検討

(有)土利夢ファーム可児は、可児市産大豆を使用した特産品として豆菓子の製造・販売を予定しており、本年夏の商品化に向け、検討を重ねている。5月10日には、(財)岐阜県産業経済振興センターの小境コーディネーターから、商品性調査、マスコミ等に対する事前PRの必要性などの助言を受けた。農業普及課では、今後も商品化に向けた開発支援を継続する。



コーディネーターとの打合せ

「ブラジル野菜」を農林事務所ホームページに掲載

リンク先を「ブラジル野菜の紹介」とし、「図鑑」「栽培方法」「料理」を掲載。

<http://www.pref.gifu.lg.jp/sangyo-koyo/norin-jimusho/kamo/agri-extention/fukyu-brazil.html>

東濃農林事務所農業普及課の普及活動状況

平成23年5月31日現在

今月の重点活動

「野菜づくり塾（トマト）」開講

瑞浪市農産物等直売所への出荷者育成を目的とする「野菜づくり塾」の講座が5月12日にスタートした。

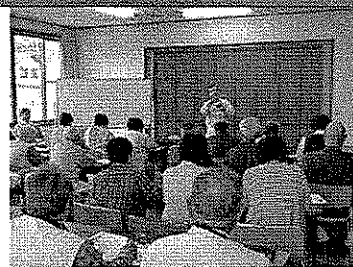
栽培から出荷までをトータルに体験するため、夏秋トマトを対象品目とした、講義、実習に加え、参加者は自作地で栽培することとしている。

当日は、塾生28名が参加し、定植、誘引、芽かき等の栽培管理の講義を受けた。実習作業は、あいにくの雨により延期されたが、17日に行われ、講義で話された作業を実習ほ場で実践した。

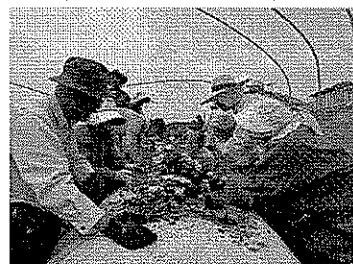
農業普及課は、講座内容の提案及び実習ほ場の企画・運営についてアドバイスした。

講座は、5回開催され、栽培技術を中心に実施される。また、最終回の7月7日には、6月16日から始まるプレ直売での販売体験も行われる予定である。

受講生の主力品目となることを期待し、今後も支援を続けていく。



講座を受講する受講生



定植作業の様子

主要農作物の生産振興

■水稲

（移植作業のピーク）

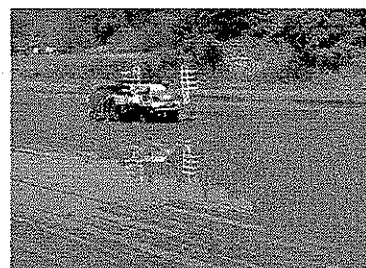
管内営農組合では、4月28日から移植作業が始まった。

4月中旬～5月上旬の低温により、苗の生育が遅く、特に個人育苗を行っている生産者は、移植作業が遅れた。このため、移植作業のピークは、昨年より約4日程遅れ、今後6月中旬まで実施されると予想している。

米麦大豆生産販売推進事業実証ほは5月18日、水稲奨励品種決定調査ほは、5月25日にそれぞれ移植作業が実施され、農業普及課はこれらを設計し、作業を確認した。

6月1日から基準田及び実証ほでの生育調査を行い、これらのデータをもとに栽培指導を行っていく予定である。

移植後の生育は、概ね順調である。



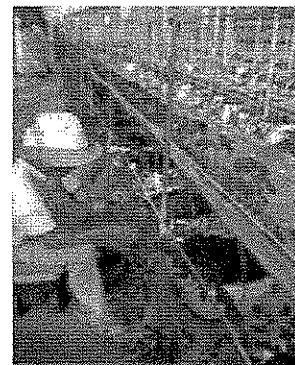
実証ほの移植作業

■トマト・なす

（本格的な栽培開始）

管内唯一のトマト専業農家（土岐市）では、定植が5月上旬終了した。春先の寒さにより若干生育の遅れがみられたものの、目立った病害虫はなく、生育は順調である。

なお、今年、土岐市では、40～50代の農業者3人が試験的にトマト栽培に取り組んでいる。栽培方法は土耕、バッグ栽培と様々であるが、地域・農業者の新たな動きを支えるため継続して支援していく。



トマトの管理作業

■花壇苗

(春を彩る花壇苗の出荷ピーク)

管内の花き農家は、花壇苗の出荷がピークを迎えている。市況は相変わらず低調であり、販売に苦慮しているが、一方で注文量が回復する兆しがあるとの声も聞かされている。

大手メーカーとの契約が主流であり、ほとんどが県外で消費されている。

担い手の育成・確保

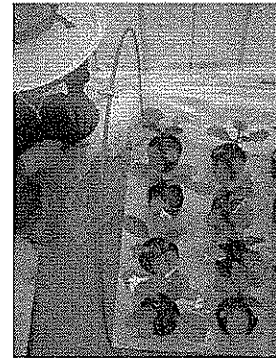
■新規就農者支援

(土岐市曾木でスタート)

土岐市曾木町に新たな農業者が誕生した。

平成21年度の就農相談から、足かけ2年「農業で夢再発見研修」と「短期研修」を経てこの春から夏秋なす栽培をスタートさせた。

農地の取得が進まず、やっと取得した農地は竹林。それを再生させ、夏秋なすと一部夏秋トマトの栽培に挑戦する予定となっている。確実な収入につながるよう全力で支援を行っていく。



夏秋ナスの育苗

■土岐市鶴里町

(集落営農サポーターが決定)

土岐市鶴里町では、営農組織設立に向けた検討が重ねられているが、5月24日に集落営農担い手発掘サポート事業を活用した、集落営農サポーターが決定した。

同サポーターは、JAとうとが雇用し、鶴里町の集落活動促進に寄与する調査や活動を行うこととしている。

今後は、サポーターの活動内容を検証しつつ活用し、関係機関の連携を強化して集落活動支援を進めていく。



サポーターの雇用
に向けた話し合い

■全域

(農業大・農大地区別懇談会の実施)

5月26日に農業大・農大地区別懇談会が実施され、管内から農大に進学している学生の保護者と農大との懇談会に普及指導員も同席し、学生生活、専攻科目への取組などの様子を聞くとともに、派遣学習や進路の決定について、情報や意見を交換した。

地域の動き等

■多治見市

多治見市の園芸・畜産農家が構成員となった「多治見園芸畜産振興会」総会が5月25日開催された。この中で直売活動等の状況報告が行われ、新たに取組を開始した学校給食への農産物納入拡大について呼びかけが行われた。

■瑞浪市

5月13日に瑞浪市担い手育成協議会総会が開催され、新規就農者育成の取組を追加する等の規約改正を含む、全7議案を可決した。

■土岐市

5月12日に土岐市植物防疫協会総会が開催され、学校給食センターへの地元農産物を提供することを本格化すること、これに合わせ認定農業者の支援を強化すること等について議論し、提案全議案が承認された。

恵那農林事務所農業普及課の普及活動状況

平成23年5月31日現在

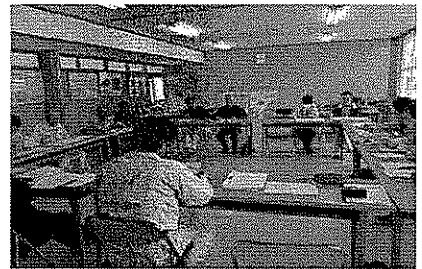
今月の重点活動

東美濃栗振興協議会に新たに技術部会を設置！

東美濃栗振興協議会では、生産者が中心となった生産技術等の維持発展を行っていくため、新たに技術部会を設置した。技術部会では、地域のクリ栽培の技術水準の維持と普及を図るため、品種選定や栽培暦などクリ栽培に係る技術検討を行う役割を担う。

5月2日には第1回の技術部会が開催され、部会長の選任と部会活動の方向性が検討された。中山間農業研究所中津川支所と連携したクリ新品種の現地試験を行うことも決定し、部会員に新品種の苗と接ぎ木用穂木の配布が行われた。農業普及課では、新品種の現地試験や栽培暦策定の支援など技術指導等を行っていく予定。

地域のクリ産地では、5年前から拡大プロジェクト活動を展開し栽培面積が拡大している。新たに技術部会を設置し、生産者自らが技術の研鑽を行うなど生産者の意識も着実に高まってきている。



技術部会の様子



現地試験苗配布の様子

主要農作物の生産振興

■活力ある新産地づくり支援事業（ブロッコリー）

産地づくりに向けて、関係機関と指導方針&意識を統一～産地戦略会議を開催～

恵那地域では、営農組合等の経営補完品目としてブロッコリー栽培に取り組んでおり、今年は120aの栽培が予定されている（昨年は68a）。

農業普及課では、ブロッコリーの産地拡大を「活力ある新産地づくり支援事業」に位置付け、重点的な指導を行うこととしており、第1回目の産地戦略会議を5月24日に開催した。

会議ではブロッコリーの産地化に関する目標設定と指導方針について協議・検討し、生産・指導販売体制及び栽培体系の確立について関係機関と情報共有し意識統一を行った。



関係機関との意見交換の様子

■夏秋トマト・夏秋なす

新規栽培者の確保に向けてチャレンジ塾はじまる

夏秋トマト・夏秋なす各生産協議会では、新規栽培者確保のため長らく見学ツアー等を実施してきたが、昨年から新たに「トマト・なすチャレンジ塾」を立ち上げられ、農業普及課では支援している。今年は育苗管理から栽培を学べるよう時期を早め、5月17日に開講(全7回)し、昨年より多いトマトコース9名、なすコース5名が受講している。

初回は中山間農業研究所中津川支所にて、開講式に続き、農業普及課より産地概要、年間作業の概要等の講義を実施した。その後ハウスにて、トマト、なすの鉢上げ作業と定植作業を行った。農業普及課では今後、11月の閉講まで各生産協議会と連携を図りつつ支援し、チャレンジ塾からさらに踏み込んだ農家研修や就農への支援も行っていく予定である。



鉢上げ作業の説明をする普及指導員

■夏秋なす

なす独立袋栽培の現地実証はじまる

なすは地域の主要な野菜品目であるが、近年は生産者の減少が懸案事項となっている。このため省力・安定生産に向けた対策として、昨年度から中山間農業研究所中津川支所が独立袋栽培技術の開発を行っている。

本年度は現地試験も平行して実施することとなり、農業普及課では中津川市内3名の農家に協力を依頼し、慣行栽培と比較しながら袋栽培の現地実証をすすめている。

5月13日には2カ所の農家ほ場で袋栽培の定植を実施し、生産者からは軽作業化を実感したとの評価が得られており、今後の技術組み立てが期待される場所である。



現地での独立袋栽培の定植ほ場

■大豆

ヘアリーベッチの増収効果を実証展示

恵那地域では集落営農組織等により大豆が生産されているが、排水性の良くないほ場への作付けや、連作による地力の低下、雑草の増加等が課題となっている。

この課題解決の手段として、ヘアリーベッチの栽培が有望であることから、農業普及課ではJA東美濃の協力を得て、中津川市と恵那市の各1カ所で4月18、28日には種を行った。2カ月後には生育量調査を行った上で鋤込み、大豆増収効果の確認を行う予定である。



ベッチ播種後の耕耘（中津川市）

担い手の育成・確保

■新規就農者

地域が一体となって就農支援をするために

地域では、就農希望者の受け入れ支援を行う体制づくりと、就農相談窓口機能を持った「就農連絡会議」を、平成19年度に普及センター（現：農業普及課）が中心となって立ちあげ、市・農業委員会・JA・県等の機関が情報共有、支援策検討をしながら就農希望者の支援を行っている。

今年度は、5月30日に第1回目の就農連絡会議を開催した。今回の会議では就農相談者や新規就農を目指す研修者への支援策を検討するとともに、地域が一体となって就農相談や技術習得・資金調達等の総合支援を行う、地域就農支援協議会の設置について協議を行った。これについては就農連絡会議の機能を活かしつつ、新たな組織に組み直す方向で検討する予定である。



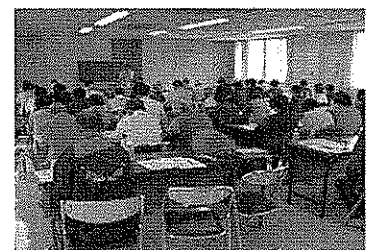
就農連絡会議で支援している新規就農希望者の研修風景

地域の動き等

■農産物直売所

安全・安心な農産物づくりを推進～道の駅「おばあちゃん市・山岡」研修会～

恵那市山岡町の道の駅「おばあちゃん市・山岡」では年2回ほど野菜の直売に関する研修を行っており、5月27日に直売所への農産物出荷登録者を対象に研修会を開催した。今回は農産物の危害防止について、また、果菜類及び豆類のこれからのポイントについて農業普及課より講義を行った。60名と大勢の参加者があり盛況となった。



大勢が参加して行われた研修会

下呂農林事務所農業普及課の普及活動状況

平成23年5月31日現在

今月の重点活動

■新規需要米

下呂市飼料用米利用組合設立総会が開催

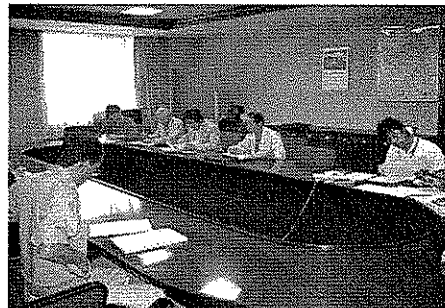
現在、輸入飼料の供給の不安定化や価格の上昇などにより、畜産農家は国内産の飼料を求めている。

そこで、下呂市において5月25日に市内で生産される飼料用米を畜産農家へ計画的に流通させるため、下呂市飼料用米利用組合の設立総会が開催された。

この組合は飼料米を利用する畜産農家等で構成され、飼料用米の流通調整、利用方法の検討及び情報収集などの活動を行うために設立された。

下呂市内では平成22年度の飼料米の面積約7haから平成23年度には約21haに生産拡大するため販売価格、個別畜産農家の年間使用量、配送時期、形態などの年間計画について情報交換が行われた。

普及課としては、畜産農家等へ供給される飼料用米の安定生産に向け、生産農家への栽培技術支援を行なっていく。



飼料用米利用組合設立総会
(JAひだ下呂支店)

主要農作物の生産振興

■水稻

田植体験で龍の瞳をPR

5月28日に下呂市萩原町でNPO法人龍の瞳倶楽部及び(資)龍の瞳による龍の瞳の消費者PR等のための田植体験が開催された。

参加者は、お年寄りから子供までの約30名で地元農家が育苗した龍の瞳の苗を約8aの水田に田植えをした。

田植え後は、龍の瞳の試食を行い、参加者からは非常に美味しいと好評であった。

今後、同じ水田で生き物観察会、稲刈り体験が計画されている。

普及課としては、下呂市の特産である龍の瞳の高品質生産支援や消費者PRを推進していく。



龍の瞳を田植体験(萩原町)

■飛騨トマト

ひだGAP研修会が開催

下呂市の益田夏秋トマト生産組合(5月23日)と下呂夏秋トマト生産組合(5月24日)で飛騨野菜出荷組合で導入されている農業生産工程管理(ひだGAP)についての研修会が開催された。

「GAP」とは、生産工程の中で食品安全の観点から注意する項目を定めて記録検証しながらより安全な農産物を生産する手法をいい、飛騨野菜出荷組合で導入されているGAPを「ひだGAP」としている。

そこで普及課からは、年度における生産履歴の記録などの「ひだGAP」の研修と今説明や今後の栽培についての講習会を実施した。

下呂夏秋トマト生産組合班別研修会が開催

下呂夏秋トマト生産組合では、地区別の班別研修を5月30、31日に3地区に分かれ実施した。

今年は、梅雨入りが5月27日と、例年より12日早い
ため日照不足が考えられる。

そのため、普及課より初期生育において樹勢が落ちないように摘果の徹底や肥培管理に注意してもら
うよう指導した。

また、今年から飛騨トマト部会では、年度における
生産履歴の記録などの「ひだGAP」が導入により
研修月末に栽培履歴の提出が義務付けられた。

そこで、生産者に栽培履歴を持参してもらい農業
普及課の職員といっしょに5月末までの内容のチェックも行った。



班別研修会（下呂市宮地他）

■茶

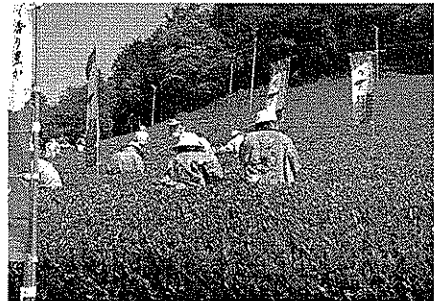
品評会出品の茶の摘採開始

ひだ金山茶生産組合では岐阜県茶業品評会への出
品のため5月19日に手摘みによる摘採を行った。

今年は春先の気温が低く生育は平年より遅れてい
たが、晩霜等の被害も少なく品質の良い茶葉を摘み
取ることができた。

手摘みによる摘採時期が終わると、茶加工施設に
よる茶生産（5月21日開始）が始まり本格的な茶の
生産が始まる。

普及課としては、組合と協力しながら良質な茶の
生産を支援していく。



品評会出品用摘採風景（金山町）

担い手の育成・確保

■指導農業士

下呂地区指導農業士へ感謝状贈呈

岐阜県指導農業士連絡協議会の総会が5月19日に
岐阜市で開催された。

指導農業士とは、優れた農業経営を実践し、高度
な農業技術及び経営能力を有し、農村青少年の育成
に熱意ある等と岐阜県が認めた農業者である。

指導農業士は、60歳までとなっているため、下呂
地区指導農業士会では、7人のうち3人が退任され
た。

今回、この3人の指導農業士に岐阜県知事の感謝
状が贈呈された。

総会の後、「農産物をめぐる地域ブランド戦略の
新展開」と演題で農産物の「ブランド化」とはなにかという内容を中心とした講演が開催
された。



感謝状を授与される下呂地区の
指導農業士（岐阜市）

飛騨農林事務所農業普及課の普及活動状況

平成23年5月31日現在

今月の重点活動

■活力ある新産地づくり支援品目（飛騨黄金）

「飛騨黄金」整枝研修会の開催

J Aひだ花卉出荷組合主催による新規栽培者を対象とした黄色輪菊「飛騨黄金」の整枝研修会が5月20、23、24日に管内5カ所で開催され、農業普及課は整枝指導を行った。研修会には計25名の生産者が参加し、整枝作業を行い、技術習得に努めた。

5月、6月は温度変化が大きく、それに伴うハウス内の温度や灌水管理が難しくなり、病害虫の発生も急速に多くなる時期となるが、定植した時に比べて、5月15日以降の晴天で急速に「飛騨黄金」の草姿が変わり、株も大きくなっているのを見ると、生産者も管理意欲が改めて沸いてくるようである。



整枝研修会（朝日町）

主要農作物の生産振興

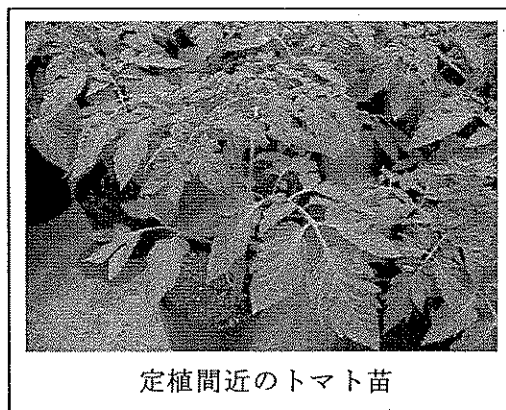
■飛騨トマト

「単収1t増」を目指して！

トマトは育苗がピークを迎えた。今年の5月は前半が気温の上下が激しく、後半は高温傾向となったため、農業普及課としては特に温度管理（夜の保温・日中の換気）の徹底を促した。

今年の苗は全体的に生育が遅れ気味で、育苗日数が50日（通常35～40日程度）もかかってしまう例もあり、普及課としては老化苗対策（追肥の実施、早めの定植等）の指導も行った。また、圃場準備も大事な作業なので、普及課では土壌水分確保や換気対策など、この時期にしかできない作業をしっかりと行うよう、栽培資料を通して情報提供を行った。

一昨年は冷夏、昨年は猛暑で飛騨トマトの単収は減収した。どのような気象になろうとも、全生産者が飛騨トマト部会の目標である「単収1t増」を達成できるよう、今後も支援を継続していく。



定植間近のトマト苗

支部研修の強化！

丹生川トマト部会では育苗から収穫開始までに10支部ごとに研修を3回開催する方針である。

5月9日には、町方支部で育苗研修会を開催し、支部の生産者15名が出席した。

育苗が本格化してきた時期でもあり、研修では生産者間で育苗状況を確認しあい、温度や水管理について意見交換がされた。農業普及課も鉢土の養分を調査し、追肥の必要性などの指導を行った。

丹生川トマト部会では、こうした支部活動の強化を通して、単収の向上の底上げを図っていく。



■飛騨ほうれんそう

越冬ほうれんそう栽培に挑戦！

今年、飛騨管内 10 ケ所で実証が行われている越冬ほうれんそう栽培ほ場のうち、5 月 17 日に高根町において収穫が行われた。

高根町は標高 1,000m を超える地域であり、ほうれんそうの越冬作型は難しく、今回は収穫間際に抽台してしまったが、色・重量とも十分であった。

生産者は高根町でも、越冬作型に取り組みないと農業では生き残れないと考えており、品種を変えて、来年もこの作型に挑戦する予定である。



■水稻

田植え順調！

飛騨地域では、5 月中下旬を中心に約 2,500ha の面積で田植えが行われた。

去年は、春先の低温の影響で苗の生育や田植時期が遅れ、田植え後の稲の活着・生育も遅れた。

今年は、育苗期間中、4 月中旬の低温で一部の苗の生育が遅れたものの、その後は暖かく天候に恵まれたため、苗の生育は回復し、平年と同時期の田植えとなった。



田植えの様子（古川町）

地域の動き等

■全城

鳥獣被害対策チーム会議を開催！

4 月 27 日、飛騨総合庁舎で飛騨農林事務所関係職員による鳥獣被害対策チーム会議を開催した。

今年は飛騨管内の 9 ケ所にモデル地区を設置し、市村と連携のうえ、総合的な取組を進めるとともに、防護柵などの被害対策の現地実証を行う計画である。

今回は、農林事務所で現場を担当する農業普及課、農業振興課、林務課の職員が集まり、活動計画を円滑に進めるための調査内容や活動内容について協議を行った。



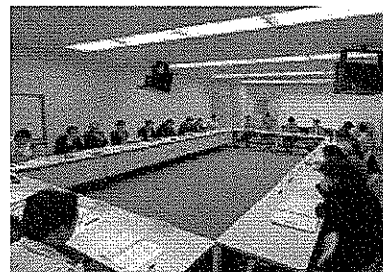
■高山市・飛騨市

飛騨蔬菜出荷組合GAPリーダー会議を開催！

5 月 17 日、JAひだ農業管理センターで飛騨蔬菜出荷組合主催による GAP リーダー会議が開催された。

飛騨蔬菜出荷組合では農産物の安全安心確保、周辺環境への配慮、作業環境の改善を目指し、「ひだGAP」に取り組んでおり、去年の課題を踏まえ、2 年目となる今年の取組内容についての意見交換や、各地域における GAP の動きの情報交換を行った。

農業普及課から JA 営農指導員とのプロジェクトチームの中で事前に協議したチェックリストの改正や、今年の新たな取組（現地確認）等について当会議で説明・提案した結果、今年『消費者に見せられる生産現場づくり』を飛騨産地の共通認識として取り組んでいくことが決まった。



県内の産地の動きと専門普及指導員活動状況

農業経営課技術支援担当
平成23年5月31日現在

1 専門普及指導員としての活動、指導内容（対策、支援等）

（1）普及指導員等の資質向上

◆調査研究支援研修を開催

5月30日、普及指導員を対象に『調査研究支援研修』の第1回目の研修を開催した。今回は、展示ほ、実証ほの設置、調査方法に関する講義・討議とともに、受講者から現地での実証ほを中心とする研修計画の発表と内容の検討を行った。

今後、現地での技術実証等の調査研究を通して、高度かつ実践的な技術・知識の習得を図る。

（花き・研修担当：井戸誠二）

（2）試験研究等で開発した先進的技術の現地への実証・普及

◆小型除草ロボット「iGamo」ロボットの現地実証2年目の取組

平成22年度新たな農林水産政策を推進する実用技術開発事業の競争的研究資金を受けて進める研究課題「水田の環境保全に配慮した小型除草ロボットによる除草技術の開発研究（情報技術研究所、中山間農業研究所）」が2年目に入った。昨年の現地実証試験は多治見市で実施したが、本年は羽島市と岐阜市（柳津町）で進行している。現在は設計打合せを終え、水稻の移植を行っている。残念ながら、現場圃場で生産者がそのまま利用できる仕様にまで完成されていないので、いかに早く現場運用させられるのかを検討すべく試験区を設置している段階にある。今後、半月も経過すると、現地でロボットが走行して除草作業を行う光景が見られる。試験担当者（試験場研究員、農林事務所や農業経営課の担当者）は、協同で改良・改善項目の点検・確認を進めていく。

（土地利用型作物担当：吉田一昭）

◆夏秋トマトにおける2期作への取組

中山間農業研究所で開発された夏秋トマト2期作の現地での取組が始まっており、高山市丹生川町の標高700mを超える現地圃場において第1段花房の着色が始まった。4月5日に定植された圃場では、定植後に低温傾向で推移した。その影響が懸念されたものの、当初計画どおり6月1日からの出荷開始を見込んでいる。今後、5段～6段で摘心を行い、1作目を7月下旬までに終了、直ちに2作目の定植を行う予定である。小面積での栽培であるが、作期の前進化と飛躍的な単収増加につながる技術として、特に基盤のない新規参入農家を中心に普及することが期待される。

（野菜担当：成田久夫）

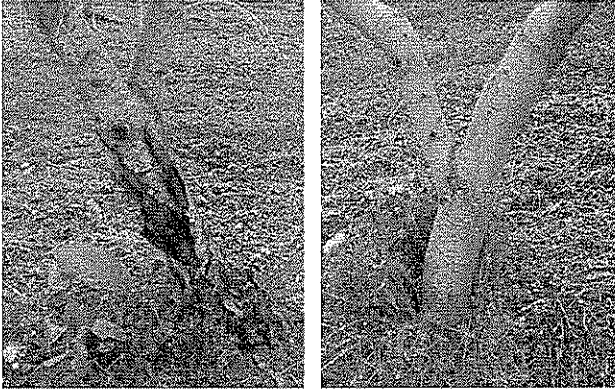
◆「ひだ国府紅しだれ」を台木に用いたモモの安定生産技術の現地実証

飛騨地域のモモは、近年凍害のため枯死する樹が増えてきた。この対策として、中山間農業研究所が育種し、品種登録した凍害に強い台木「ひだ国府紅しだれ」を飛騨普及課とともに現地実証を進めている。

5月17日には中山間農業研究所、飛騨普及課、JAひだの担当者と現地実証園を巡回し凍害被害状況を確認した。今年も一部の園で凍害が発生したものの、樹齢6～7年生の「ひだ国府紅しだれ」台木のモモは枯死率が低く、品種の効果が確認できた。今後、果実品質調査もあわせて行い、この結果を各生産組合に報告、台木の普及を推進していく。

（果樹担当：石川嘉奈子）





写真左：モモ凍害被害樹 右：ひだ国府紅しだれ
台木の健全樹

(3) 県下の技術の統一

◆ 経営情報担当者会議を開催し、経営体支援の情報交換を行う

5月26日に農林事務所農業普及課経営情報担当者会議を開催した。そこでは、個別及び組織経営体が、効率的かつ安定的な農業経営を行うことができるよう、各種事業の進め方や地域における課題等を話し合った。

今年度、担い手育成関係事業の担い手経営力向上サポート事業は廃止、岐阜県担い手育成総合支援協議会の担い手関連事業は農業会議へ移行と大きく体制が変わった。このため、県下での対応を平準化するための打合せも行った。

また、経営管理支援データベースの活用について、個人情報取り扱いの注意点を再確認するとともに、県下の農業普及課より活動報告をいただき他の農業普及課の参考とした。

(農業経営担当：遠山 敬司)

